

# ピエール・ブルデュー 教育社会学論

## ——科学論 再生産論——

# Pierre Bourdieu Theory of Sociology of Education

## ——Science-Theory, Reproduction-Theory——

天 沼 英 雄

AMANUMA, Hideo

### 【概 要】

拙稿では、各章の中で、学校論、教育内容論、就学機会、学歴といったテーマを挙げて論述している。ピエール・ブルデューの科学論・再生産論を基に上記したテーマについて論ずることが目的である。文化的再生産論とは、まさに学校教育論を主要なテーマとする理論である。ブルデューの研究は、文化資本の働きや象徴的支配の働きを明らかにすることが狙いとされている。科学論は、科学界を一領域とした科学社会学の研究並びにアカデミズムの問題を論じている。ブルデューは、科学資本というキーワードを用いて、科学界と権力との関係を分析している。拙稿では、従来の教育社会学研究における捉え方に対し、ブルデューの分析の有効性と問題点を論述する。

### 【キーワード】

再生産 科学 学歴 文化 就学

## 1、はじめに

拙稿は、ピエール・ブルデュー（1930－2002）の教育社会学について、科学論と再生産論を対象として考察する。文化的再生産論を学校教育論と捉え返し、ブルデュー教育社会学における教育の意味を問う。また、科学の目覚ましい発展における今日的なさまざまな課題に対して、教育社会学的知見から検討するために、ブルデューの理論について、従来の科学論・再生産論との相違を明らかにする。今日の科

学界・学校界における問題を考察するための観点を明らかにすることによって、一層のブルデュー教育社会学の理解を深めたいと考える。かつて、筆者が著した論文（『ピエール・ブルデュー 教育社会学論——階級・権力・不平等の観点——』現代ビジネス研究第6号）では、パラダイムの転換をもたらしたといえるか否かを問いかけることで終えた。我が国の教育社会学界への影響を問いたのである。ブルデューという巨星の影響力は、教育社会学者の間に浸透していると考えている。しかし、教育社会学全

体のパラダイムの転換とは言えないのではないかとというのが、筆者の考え方である。

## 2、科学論

### 2-1、科学社会学

ピエール・ブルデューのコレージュ・ド・フランスにおける最終講義は、『科学の科学——コレージュ・ド・フランス 最終講義』として刊行された。様々な「界」について論じた最終講義が科学についてであったことは、自ら聖別されたアカデミアンであったブルデューの社会科学・自然科学を問うことのない、関心の広さを証明している。社会科学に足場を置きながらも、自然科学を研究領域として、自らの研究を深めた、世界の最も優れた研究者の一人と言える。

従来の科学社会学の第一人者としては、R,K, マートン、T,クーン、新堀通也氏の名が挙げられるが、その学説を振り返りつつ、ブルデューの科学社会学の特徴を明らかにすべく論を進める。

R,K,マートンは、科学、科学者集団が拘束されているとされる価値志向を「科学のエトス」として、4つの価値を挙げている。それは科学が従うべき規範・倫理命題であり、科学に対する信頼性を確保する上で必要条件である。4つの価値とは、「普遍主義、公有性、利害の超越、系統的な懐疑主義である」。<sup>1</sup> マートンの説明によると、「科学的知」は、あらかじめ確立された基準に即して検証されるべきこと、個人の私有財産でないこと、専門家仲間の厳しい検証を受け、同僚に対して責任を負うこと、検証結果が出るまでは判断を差し控え、客観性が確認されるべきこと、といった「科学エトス」を充足しなければならないのである。科学の社会的効果、社会構造に及ぼす影響の観点から、正統性を得るために厳しい吟味に服さねばならないのである。マートンの科学社会学について大膳司

氏は、科学のエトスの一つ「公有性」について次のように論じている。

公有性とは、科学的「知見は科学者の共同体であるところの科学社会＝学界に帰属する」<sup>2</sup>ということであって、「科学者が先取権を追求し、創造的発明発見に対して、科学者集団による「専門職的な承認」<sup>3</sup>が与えられるときに初めてエポニミー的報償が与えられる。科学界とは、科学的知見が同じ専門家仲間からの真偽の検証後の承認によって、権威が与えられる、閉じられた「界」なのである。エポニミーは、同じ科学界からしか付与されることはなく、逆に先取権を競ってデータの捏造や剽窃などの逸脱は、厳しく戒められねばならず、マスコミ等からも批判にさらされることになる。

新堀通也氏によると、科学社会学は科学と社会の関係を研究する学問であって、主要には三つのアプローチがそこに成立する。「(1)科学の社会的条件、(2)科学の社会的機能、(3)科学社会の社会学的考察の三点である」と述べている。マートンの科学社会学について「マートンは、科学を一個の文化共同体」と捉えていて、科学のエトスがそれを拘束している。従って、マートンの科学社会学は「規範的アプローチ」と呼ぶことができる。また、「マートンは、科学の発展が累積的であることを重視」していると述べる。<sup>4</sup>

科学の生成・発展は、継続的な過程であり、科学のエトスによって拘束され、社会的な行政・制度的条件によって基礎づけられていると捉えている。

T,クーンは、主著『科学革命の構造』において、パラダイムという概念に基づく科学革命について論ずる。「一般に認められた科学業績で、一時期の間、専門家に対して問い方や答え方のモデルを与えるもの」をパラダイムと呼ぶ。「科学革命という時、それはただ累積的に発展するのではなくて、古いパラダイムがそれと両立し

ない新しいものによって、完全に、あるいは部分的に置き換えられる」現象であると、科学の発展モデルを提唱した。<sup>5</sup> マートンの科学社会学における科学の累積的な発展という捉え方に対し、T.クーンは、通常科学では行き詰まり、危機に直面することによって、質的な変化を伴い発展を遂げるとする「変革モデル」を提唱した。変革モデルでは、新旧のパラダイム論争が生起し、古いパラダイムに変わる革新性が現れる。新しいパラダイムの台頭による「科学理論の構成にさいして科学者集団の演ずる社会学的役割を極めて重視した」<sup>6</sup> 理論と言える。謂うならば、科学実験と科学者の間をパラダイムが結び合わせる科学モデルである。科学革命は、科学的知の発見とその妥当性を検証するシステムとしての、科学者の科学的認識過程や科学者集団（「科学界」）による検証が重要な位置を占めている。

D.L.エックバークらは、「パラダイム概念は最も狭義にはクーンのいう“見本例”であり、それは、研究の方針・枠組みを与えてくれるものである。これを保持する「研究者の統合された共同体があつてはじめてパラダイムが存在する」と述べる。科学の発展は、パラダイムを支持する科学者集団によって成し遂げられるのである。

一方、社会科学、その中でも社会学におけるパラダイムの状態はどうか。「社会学全体というレベルでパラダイムが存在するかと問うことは疑問」<sup>7</sup> である。社会学全体に及ぶパラダイムを見出すことは難しいのではないだろうか。社会学には様々な学派があり、機能主義、葛藤論、現象学、エスノメソドロジー、再生産論等、方法論や研究グループもまちまちで、社会学全体が統一した見本例ですべて解明が可能とは考えられず、研究者の信念ともなったパラダイムを発見するのは困難と言えるのである。

## 2-2、ピエール・ブルデューの科学論

以上のような、従来の科学社会学の議論が存在する一方、これに対してピエール・ブルデューの科学社会学は、象徴資本としての科学資本という捉え方から論じている。ブルデューは「科学資本は象徴資本の特別な一種で、認識と認知に基づく資本です。科学資本は信用の一形態として機能する権力です。ですからその権力の作用を受ける者たちの信頼あるいは信念を前提しています」<sup>8</sup> と述べる。科学資本を一つの象徴資本と捉え、科学界の認識・信用を基礎とした象徴権力として機能する資本の一種という捉え方をしている。

科学を基礎づける「界」とは、「実験室＝界」であって「科学的な資本と管理的資本という二つの種類の分布構造」から成る一つの界を形成している。そして界を構成する科学的力関係（＝科学者間の力関係）は「二種類の資本（世俗資本と科学的資本）の分布構造によって」定義される。科学独自の権威と他方、世俗的な権力であり、「科学者集団の再生産を掌握する諸制度——アカデミー、委員会、審議会など」<sup>9</sup> から組織されており、界は二種類の権力の合成からなる。更に、科学者集団＝科学社会の再生産と合わせて、科学者＝研究者としての自己の再生産についても検討の必要がある。ブルデューは「客観化の客観化」の方策として自らの研究実践に対する反省性「研究実践の過程における自らの行っていることを徹底的に省察」<sup>10</sup> すべきことの必要性を強調する。アカデミズムの場における科学者自身の客観化は、知の客観性を担保するための条件と言えるのである。

科学革命に関する議論について、ブルデューはT.クーンのパラダイム論に対して「事実上、科学の世界が自律性という考え方を導入している」<sup>11</sup> ことを明らかにしていると論ずる。しかし、科学の発展は科学革命による、即ちパラダイム転換によるものと論じてはいない。それは

「ひとつは生産者育成の様式を変えることです。高等教育システムをめぐる闘争」<sup>12</sup>によるものである。闘争の場として科学界を捉え返し、自ら教育改革委員会の委員長の経験を踏まえつつ、システムの構造・ポストを巡るたたかい、教科を巡るたたかいの存在を指摘する。そして科学革命は専門化した「知覚・評価図式の体系としての専門ハビトゥス」<sup>13</sup>となった科学資本の台頭を伴うものであるとする。前者は「行政的資源」を巡る資本であり、後者は、「身体化されている資源」としての科学資本である。即ち、科学革命は科学者育成制度の条件の変革を含んだ変革を意味している。

以上、ブルデューの議論に対して、隠岐さや香氏は、現代の科学研究には「技術問題」や「市場」の役割を欠くことはできない。ブルデューの議論にはそれが見られないとして、次の様に述べている。「ブルデューの科学論が象徴的支配の社会学の枠内に留まり、技術の次元を十分に組み込んでいない」、また「自律した科学界が「公益」のために生み出すものがリスクでないという保証はどこにもない」<sup>14</sup>と論じている。狭く科学界に議論を閉じ、社会的世界との関係認識に欠落した点があることを指摘している。ブルデューの科学社会学は、科学を巡る権力の社会学並びに危機管理の社会学として読み返すことが必要であろう。

### 3、再生産論

ピエール・ブルデューの文化的再生産論の議論に入る前に、従来の社会学における再生産論と文化論について検討する必要がある。文化を再生産する「場」としての学校界の検討をするのである。学校とカリキュラムの研究へのアプローチにおいて、再生産論の意義・有効性が認められることが明らかにされる。

拙稿では、ブルデューが批判するルイ・アルチュセール、エチエンヌ・バリバルの学校論

について検討する。ブルデューの批判の要点は、学校というものは、国家イデオロギー装置というように「装置」ではなく、まず言語能力を育てる「場」である。「装置」というように形が強制され、一種の強制＝服従の下で学習が行われているのではないということである。

#### 3-1、国家のイデオロギー装置としての学校

再生産論の概念について、エチエンヌ・バリバルは「社会諸関係の生産とその保存」という規定をする。そして、三つの特徴を挙げている。生産諸関係の再生産とは、社会の事物や個人が存在し、継続する為には生産と同時に再生産を続けなければならないことを意味する。第一の特徴は「歴史的連続性と同一概念」ということであり、生産諸関係が継続していることである。第二は「社会構造のさまざま水準の結びつきである」。経済以外の諸条件の絡み合いがあることである。第三は「生産の継続的連続性そのものを確固としたものにする」といった条件を満足する。三つの特徴を備えた社会的諸関係が再生産を続けることである。様々な技能を習得することは、社会・制度に対して服従の一形態でもある。しかし再生産は静態的な「反復」であるという考えは誤りであり、K、マルクスの述べる「生産様式の永続性」とは即ち「再生産もまた、その変化と新しい構造化の形態をとる」<sup>15</sup> 関係、生成し更新を続ける関係構造である。自分自身の活動を通して行われる「再生産の内に形成される主体」<sup>16</sup>の働きがある。主体の働きにより、更新された生産諸関係が連続し、強められつつ再生産されていくのである。この生産＝再生産を成立させる「装置」として、ルイ・アルチュセールは、「国家の抑圧装置」と「国家のイデオロギー装置」(AIE) という概念規定を行う。また、アルチュセールは概念的に「国家権力と国家装置の区別」をする。国家装置 (AE) こそが国家権力を執行し、社会

の諸関係に対して抑圧・支配を行う、まさしく国家である。即ち、国家装置（AE）を国家の抑圧装置と国家のイデオロギー装置（AIE）とに分けており、次の様に規定している。国家の抑圧装置とは、政府、行政機関、軍隊、警察、裁判所、刑務所等が主として抑圧機能を担う機関である。その役割は、暴力的な機能を果たす装置である。一方、国家のイデオロギー装置とは、イデオロギー的に機能する装置ということである。「国家のイデオロギー装置の場合は、限界においてはと言え、また限界に限られるが、副次的には抑圧的に、つまりきわめて弱められ、隠された、言わば象徴的な抑圧として機能するのであるが、イデオロギー的な機能の方が圧倒的に優勢である」装置なのである。一例として「学校と教会は賞罰、排除、選抜、等々の適当な方法によって、《訓練》するのである」<sup>17</sup>として、イデオロギー機能を主たる機能とするが、必要に応じて抑圧をかけ、圧力をかけることもあることを示唆している。アルチュセールは、国家のイデオロギー装置（AIE）として、次の制度を挙げている。その中でも最も資本主義的生産様式に対して、労働力の予備軍を再生産する役割を担うのは学校である。

- 「——宗教的AIE（さまざまの教会制度）。
- 教育的AIE  
（さまざまの公的私的な《学校》制度）。
- 家族的AIE。
- 法律的AIE。
- 政治的AIE  
（政治制度、さまざまな政党）。
- 組合的AIE。
- 情動的AIE  
（新聞、ラジオテレビ、等々）。
- 文化的AIE  
（文学、美術、スポーツ、等々）。」<sup>18</sup>

以上の様に、国家のイデオロギー装置は、国家の抑圧装置が前述した様な限られた機関である

のに対して、国家機関の内外に分散されている。国家のイデオロギー装置は「国家が直接に権力を行使して機能させるものではなく、むしろマスコミなど「私的な領域で機能させるものである」<sup>19</sup>。その中で、学校は中心的な国家のイデオロギーを伝達する装置なのである。実際の役割機能については次の様に論じている。「〈学校〉は……支配的なイデオロギーのなかにくるまれた「ノウハウ」（フランス語、算術、博物学、諸科学、文学）や、あるいはごく端的に、むきだしの支配的イデオロギー（道徳、公民科、哲学）を子どもたちに教え込む」<sup>20</sup> 機能を果たしている。教え込みの働きは、しかも、国家の支配的なイデオロギーの下で、教育的働きかけによって行われている。学校は、国家の支配的なイデオロギーを教え込む装置なのである。

ブルデューによると、このことを隠蔽し、学校はイデオロギーを欠如した、中立的な「場」であるというイデオロギーによって支配されている。まさに、学校は中立的な場であり、教育を受けることは支配階級の押しつけではなく、必要不可欠なこととする国家のイデオロギーに支配されることになる。そのような隠された支配的なイデオロギーの中で、労働力の予備軍としての特殊技能が再生産されるのである。子ども達は学校において、資本主義社会における支配的イデオロギーに対する服従の形態を、自然に身に付けることになり、労働力の再生産が行われるのである。そして同時に、このプロセスによって、資本主義の体制秩序が維持され、再生産されることになるのである。

以上、ルイ・アルチュセールの再生産論は、これまで主要な再生産論として社会科学界において主要な座を占めていた。

ピエール・ブルデューは、それに対して独自の再生産戦略・再生産様式について論じている。「再生産戦略とはそれによって累積の資本

種の所有者が自らの財を保有ないし向上させようと努める戦略」である。その中には必然的に「象徴戦略」が含まれている。実践行動を、再生産の戦略という概念でもって統一して把握する。ブルデューは、再生産戦略として生産戦略、相続戦略、教育戦略、予防的と名付けられる戦略、経済戦略、社会関係の投資戦略、結婚戦略、社会的正当化論の戦略を挙げ、それぞれの意味内容と戦略相互の関係について論じている。各戦略は、ライフサイクルのさまざまな地点において展開される。戦略間の相互依存関係について、ブルデューは次のように論じている。「出産戦略の帰結を、教育戦略は考慮に入れなければならない」、「それと同様、結婚戦略は、おそらく、教育戦略と無関係ではないだろう」<sup>21</sup>と論ずる。これらの戦略は、ペアルン地方の伝統的な教育投資を伴う、結婚——出産——教育戦略の密接なつながりに基づいて論じられたものである。

再生産様式については、二種類の様式に大別している。一方は「同族型再生産様式」他方は「学歴型再生産様式」である。「同族型再生産様式」とは「企業発展確保をはかる純経済戦略と、一族の再生産を確保し、……親族間の一体性を確保する戦略」の連関による様式である。「家族再生産を図る（結婚戦略、出産戦略、教育戦略、相続戦略）が、経済資本再生産確保を図る純経済戦略」と連関し、家族サイクルにおける戦略と企業の発展という経済戦略とが結ばれた再生産様式である。一方、「学歴型再生産様式」は、「官僚的大企業に特徴的な再生産様式においては、学歴がステータスとしての称号……ではなく、真の意味での採用資格になる」というように、学歴資本が企業の採用人事戦略に不可欠な再生産様式である。「二つの再生産様式が経済権力〈界〉の内部に共存していることになる」<sup>22</sup>

高学歴化の進行が、経営層の高学歴化を招

き、企業規模の拡大につれて、学歴保有者の割合を高める状況にある。「『遺産相続者』にとっても、学歴の必要性がますます高まっていることは議論の余地がなく、それは学歴型再生産様式の漸進的勝利を信じさせるかもしれないが、同族再生産様式と結託している経営者は、学歴による障害を迂回する方法」<sup>23</sup>として「競合」をはかる。その一例として、「公共奉仕」と生産性の向上が組み合わせられた新しいイデオロギーによってその生産様式の正統性ははかられるのである。しかし、「学歴再生産様式は……学校免状の再統一——そしてそれによって、権力の再配分——を絶えず行うが……現行の配分とまったく同一の機械的な再生産でもないのである」<sup>24</sup>。同型の「反復」ということではない。学歴型再生産は同族型再生産と異なり、確率的であり、獲得型の再生産様式であって、累積された文化資本による再生産である。血縁関係の様な相続的固定的で継続性が確保されていない。基本的には、能力主義による再生産様式であり、同型の再生産が継続・反復されるのではない。

### 3-2 学校における文化としての教育内容

学校教育は、文化の伝達を通して、子ども達を労働者予備軍へと再生産する。では、学校で教え込まれる文化としての教育内容・カリキュラムは、どのような性格を持ち、子ども達に配分されるのであろうか。

ピエール・ブルデューの教育社会学は、文化的再生産論と称されている様に、文化が再生産プロセスに介入するという理論である。ここで、子どもに伝達される文化を教育内容・カリキュラムと、文化的再生産過程を学校教育全体と読み替えることが誤りでないとすれば、教えられる価値ある文化としての教育内容とは何か、という問題がある。学校の成績判定や子どもの学力階層における区分が、「聖別化」と「烙

印づけ」の機能を果たしている。教育内容が価値ある資源として、学力差に応じて不平等に配分されることから、優秀さの一元的な階層の区分が生じる。子ども達に蓄積される学力格差の程度、試験の選抜において、教育内容はどのような機能を果たしているのかについて、社会学的な意味を検討することが必要である。

イマニュエル・ウォーラーステインは、文化と言う概念は、「個別主義的」であって「一連の価値あるいは慣行のことである」と述べる。文化は個々に偏在するなど多様性がある。しかしながら、文化の価値は「普遍的ないし普遍主義的と考えられ、基準」に照らして正当性が認められる。そしてその際の正当性の根拠となるのが、国家の威信であり序列化である。国家は権力的に「文化の多様性を生み出し」つつ、「文化の画一化を生み出してきた」<sup>25</sup>のである。国家のパラドキシカルな役割遂行がみられるところであり、教育に対する国家の権力の在り方を象徴している。

即ち文化の正当性は、国家的規準によるものであること、また国家は文化の再生産に関与し、多様性ととともに画一化といったパラドックスな関係にある。文化を社会学的に捉えるならば「文化的活動ないし判断は、つねに正統性への連関を含んでいる」<sup>26</sup>のである。権力支配における正統的な文化の承認や認可というシステムが、文化の伝達を主とする教育機関に対する統制の手段となっているのである。

我が国の場合、歴史社会学的な研究によれば、竹内洋氏が論ずる様に「教養」の問題と西洋文化の伝播という問題が存在していた。近代日本が必要とした学歴エリート形成の問題を一端、文化と身分再生産の問題として捉え返すと、近代日本の文化である「教養」ハイカルチャーと貴族の対応が明らかになる。しかし時代が下って、大衆サラリーマン予備軍である大学生の、いわゆる「キョウヨウ」は内容が異なる

ものの地位形成の戦略という観点からは「相同性」がみられる。「教養」・「キョウヨウ」という文化が、学歴階層に結び付き種別化の働きをする。教養文化と学歴・身分の再生産の間に関連性がみられたのである。<sup>27</sup>

文化を価値ある教養としたアプリアリな捉え方ではなく、文化の負債の側面をみるアプローチがある。「文化的資産と文化的負債という概念」をキー概念として考察するアプローチである。従来のカリキュラム観は、「文化的富」の概念のみであり、教育内容は正当なカリキュラムを通して伝達され、再生産される、と捉えられる。しかし、「子どもどもたちには、自らの文化の資産を評価するよう教える必要があるだけではなく、文化的負債から自分の身を守るようにと教える必要もある」<sup>28</sup>のである。階層社会では、子ども達に異なるカリキュラムを通して、異なる教育内容が配分されることになる。文化の多様性において一部の文化的富は伝達されることなく、文化の伝達に欠落が生ずることもある。しかも、多くの文化遺産は、学校以外のさまざまな機関（図書館、博物館、美術館、民俗資料館、その他さまざまな研究機関や資料館、行政機関その他）に分散され蓄積されている。従って、子ども達に優れた文化が伝達されないままである場合もある。また、学校において同一のカリキュラムを通して学ばれる経験は、多様でもあり、同一の教育内容が習得されているわけではない。学校における文化の獲得は、文化そのものの多様性と配分の多様性において、ピエール・ブルデューの文化的再生産論のアプローチとは異なった「文化的富」のアプローチ（反面、文化的負債のアプローチ）という問題のとらえ方にも有効性がある。教育内容・カリキュラムの編成に際し、その背景と文化的課題の所在が明らかになるからである。一例を挙げれば、「文化的富＝文化的負債」アプローチからみた今日的課題としては、環境問題、

健康問題、宗教・民族問題、原子力その他科学技術の問題、国際間の歴史認識の問題、等々多様な課題に対応することが考えられる。これらの課題について、カリキュラム編成において教育内容をどう構成するのか。「文化的富」のアプローチは、文化的価値のカリキュラムへの編成に対するアプローチとして価値判断を含んだアプローチである。更に、戦争遺跡などの負の文化遺産の保存・伝達といった再生産の課題に対しても可能性のあるアプローチである。グローバルそしてローカルな観点から、国際間の問題、国際社会に対する理解を図る教育内容の検討も必要であり、国際社会の安全保障や人権問題など、今日の状況は、まさに当事者が文化的富—文化的負債の両極に分かれ争う状況がある。我が国の負の歴史に対する歴史認識の育成において、文化的負債を後世に継承し、二度と同じ過ちを犯さないと誓い、文化的遺産として子どもたちを教育する。そのためにはそれらを文化的富として、カリキュラム編成に組み入れ、教育内容として活かす再生産の在り方が必要である。文化を教育内容として活用する際において、現実・事実に触れて考え、自分の考えを表現する教育活動が重要な位置を占める。カリキュラムの（選択・編成・伝達・評価）活動に対して、文化的富のアプローチならびに文化的再生産論のアプローチともに、カリキュラム編成の観点として有効性をもつと考えられる。

## 4、就学機会と学歴の再生産

### 4-1、就学機会の再生産

ブルデューは、『結婚戦略』において、ベアルンの農民の娘たちの就学問題から就学が「少なくとも都市的洗練の外的記号を身につける機会となっていることについて述べる。また父親が「より多くしかもより長く就学させ」<sup>29</sup>る傾向があることを明らかにしている。娘や若者たちが就学し、離村することは農村の解体を進

める。一方で庶民階層や農民階層の子ども達の初期社会化において、「家庭を中心とした生活構造のなかで習得される階級的ハビトゥスは、社会化の初期の段階から基本的な言語能力は学習態度などの文化的能力という形」<sup>30</sup>で形成される。それは伝統社会に生きる為のハビトゥスであった。近代化・産業化の進展が農村社会の若者たちに都市的な文化的能力の獲得へと向かわせる。学校で学ぶという形式は、独自の望ましいとされる行動のパターンやふるまい方についても、学習することになる。それは「学校ハビトゥス」と言われ、伝統社会とは異なるものである。この両者の間には溝があり、民俗学者柳田國男氏が民族社会におけるしつけ=教育について「笑いの教育」と呼び、学校教育との相違を明確に描写したように、学校と伝統社会の間のハビトゥスの相違は教育課題である。

「学校に先立って、あるいは学校の外に児童・生徒の生活をつつみこんでいる社会空間の文化的条件」<sup>31</sup>や学校以前の知識・技能の価値の「習得の様式」についての理解が必要である。学校外で学び身に付けた知、ライフサイクルの各ステージで獲得した学習ハビトゥスと学校における学習ハビトゥスとの相違の問題である。

黄順姫氏は学校に適応的なハビトゥスを「学校ハビトゥス」と呼び、教師との接し方や友人作りなどの適応性のあるハビトゥスを見出している。また、学校には独自のハビトゥスが規範化され、「学校ハビトゥス」と家庭の中などで身に付けたハビトゥスとの距離によって、生徒たちの学校生活への適応度が異なることを明らかにしている。「学校のハビトゥスと類似性の高いハビトゥスを持つ生徒」は、自然に問題なく学校に適応している。一方「類似性の低いハビトゥスを持つ生徒」の場合、学校生活に「危機感を覚え、自分のハビトゥスを変化させる」<sup>32</sup>ことによって、適応を図っていくことを明らかにしている。「学校ハビトゥス」と学校外、



主に家庭生活で身に付けていく生徒自身のハビトゥスとの相互作用から「学校ハビトゥス」は日々再生産され続けている。また、学校はハビトゥスを巡るコンフリクトが発生する場である。「新しいハビトゥスを正当化する生徒の実態」<sup>33</sup>によって、旧ハビトゥスと入れ替わり新しいハビトゥスの正当性が認知され、日常性が獲得されるようになる。ハビトゥス戦略間のコンフリクトによる日常性の変化・安定性の獲得がなされる。このような戦略を通して「学校という界は、他のどの界にもまして、自分自身の再生産へと方向づけられて」<sup>34</sup> いるのである。学校はハビトゥス戦略を巡るコンフリクトの場なのである。

ところで、学校界は、生徒たちの生活格差を学力格差へと変換する場である。ブルデューによれば「日本などすべての先進社会において社会的成功は、既存の社会的差異を学校という場で聖別する最初の命名行為」<sup>35</sup> なのである。生徒の間にある能力差を社会的差異へと変換する機能は、換言すれば、学校界では、教育過程における『見える』教育方法と内容が、実質的には、『選別と排除』の過程として機能<sup>36</sup> することを意味しているのである。学校界がこのように機能するのは、国家の再生産装置に他ならないからである。

我が国においては、教育界に普及している能力観である「本人の努力による学業の達成度」としての能力観、並びに「努力主義プラス横ならび平等主義」という能力観が存在している。家庭的条件による相違、「それを本人の努力の不十分さの結果と観念させる」<sup>37</sup> 能力観でもある。我が国では問題視されることもなく、社会通念ともなっている。したがって、学校は機会の平等の下にあり、生徒の家庭背景の相違や生活環境の相違を所与として、それぞれの能力に相応しい教育を通して、教育的知識の習得がなされ、子どもの文化資本の相違が形成される。

「階級間の違いを平等な競争の結果にあるものとしてしまうのである。」<sup>38</sup> 学校を支配する平等主義のイデオロギーに支配され、学力差が再生産されているのである。このメカニズムに対して、次の様に問い返すこともできる。「教育を介して閉鎖的な『身分』が形成される兆しが日本にみられるか否か」<sup>39</sup>、身分や格差に基づく実質的不平等が、学校界を介して再生産されていないか、という問いである。

実際には、1960年代の我が国の場合「マニュアル階層の再生産というよりも、マニュアル層の形成と教育の拡大とが連動していた」<sup>40</sup> ことが検証されている。また、ブルデューのフランスにおける中・高等教育の変容に関する研究においても、1960年代後半から、高等教育への就学率の上昇の下で「不平等のパターンは『ほとんど変わらなかった』」<sup>41</sup> ことが明らかにされている。そして、更に「進学確率の一般的な拡大のなかで、1962から1966年にかけて教育機会・構造の変化は、上層階級の文化的特権を確固たるものにした」のである。「高等教育進学機会において、1.5%だった労働者の子弟の機会が3.9%になっても、高等教育を考えられない未来・・・とする、そのイメージを変えるには十分では」<sup>42</sup> なかったのである。下層階級の子弟の高等教育就学機会の不平等が再生産され、排除される傾向が、日本とフランスにほぼ同時期にみられたのである。以上の事柄を簡略化すれば、1960年代、格差の再生産があったということである。再生産は、生産諸関係の再生産であると、アルチュセールが論じているように、階層関係が教育機会を通して再生産されていたのである。

#### 4-2、学歴の再生産

ブルデューの文化的再生産論は、学歴＝資格の議論において、学校・大学が果たす役割機能について、政治・経済との係りを中心に論ずる。

アルジェリアにおける調査研究において、「学歴も資格もない人にとって、たいていは、職業を選択する自由は、無に等しく、就職指導も、就職の斡旋も、偶然の帰結しかないのだ」<sup>43</sup>と論ずる。学歴や資格は、社会参加に必要な不可欠の要件である。今日、学歴資格は、資本主義社会への参入要件と言えるのである。

国家貴族と呼ばれるグランゼコールのエリート校を出身とする官僚や大企業、大学界などの権力界にいる人は、父親がバカロレア以上の学歴保有者で、恵まれた家庭出身、パリ地方出身者が多い。自らは高等師範学校や国立行政学院を出身校とし、その「学校免許状は、位が高くなればなるほど、貴族の称号、社会的尊敬（栄誉）として機能する」のである。社会空間における位置と獲得した文化資本の結果である称号としての学歴が、新しい身分の形成に役立てられる。また「学校の免状を取得した者の数の増加は、免状を持たない者や現場の叩き上げの者（とりわけ管理職の）を排除し「学歴に与えられる認知を一般化」<sup>44</sup>するのである。持たざる者に対する排除原理として機能する学歴の働きが述べられている。学校の役割機能が職業資格との関係から、文化資本獲得者の分類と、それによる「社会空間構造の再生産」に寄与することが調査研究から明らかにされている。また、大学界の権力界再生産に対する寄与を論じた『ホモ・アカデミクス』において、1968年の五月革命の危機についても論じている。五月革命を「再生産様式の危機（学校的次元における）」と捉え「教育制度が社会的再生産にもたらす貢献がますます大きくなっていき、その結果、学校制度が社会闘争の係争物としての比重を増加して」<sup>45</sup>といった結果、社会全体の危機をもたらしたと論じている。大学界は、社会体制における序列・秩序の再生産に寄与しており、経済界・政界といった権力界への人材供給のパイプの役割を果たしている。しかし、1968年

の危機は、大学界のパイプの役割に機能不全が生じ、再生産過程である大学・学生と支配層のハビトゥスとの摩擦が生じた。一方で「経済における職業が〔必要とする能力上の〕特性とのあいだに、ある食い違いがあらわれ」たのである。また、経済界・政界の需要と大学界の供給との間に差異が生じ、産業の高度化に伴い必要な職業能力・適性に变化が生じた。その結果、「学歴＝資格と職業との関係、学生の不満、は常に政治闘争の対象」<sup>46</sup>であり続けているのである。

ブルデューはまた、言語資本に関する研究において、ある言語が国家によって公用言語・公式言語として合法化＝正当化され「ひとつにして同一の《言語共同体》への統合というものは、政治的支配・・・の産物であり・・・再生産されている産物」<sup>47</sup>であると論じている。言語資本は、文化資本の重要な要素であり、国家の統制下におかれ、政治的支配の影響を受けるのである。キース・A・リーダーは、このような再生産のメカニズムについて、ブルデューの研究は「教育制度が果たしている重要な政治的役割」<sup>48</sup>の解明にあると論ずる。ゲイビー・ワイナーは、トニーブレア首相の1998年のスローガンを引き合いに出して、教育は投資の領域であり「教育が政治的資本であることを象徴している」<sup>49</sup>演説であると論ずる。

かくして、ブルデューの再生産論は政治資本と関連し、教育システムが政治闘争の争点ともなる観点を提示した権力の社会学と言えるのである。

## 5、文化的再生産論批判

ルイ・アルチュセールの再生産論は、国家権力がイデオロギー支配を通して抑圧的に機能するという理論である。それに対し、ブルデューの再生産論は象徴的働き、即ち文化的恣意性を象徴的暴力と捉え、支配階級のイデオロギーを

隠蔽し、隠された実質的不平等を暴露する一種の知識社会学である。象徴的な支配は、被支配者の側に排除されることへの「合意」や地位の不平等な配分を、自らの責任として受け入れさせることに基づいている。

ブルデュー再生産論においては、このような支配形態、即ち、支配階級のイデオロギーがアプリオリに労働者・庶民階層の「合意」に基づいて受け入れられるとする理論の妥当性が問われる。再生産が支配階級のイデオロギーへの「合意」によって統合され、妥当性を得ているという理論は、現実における矛盾（例：労働者・庶民の要求が押し切られる等）との整合性の問題を生ずる。1960年代、フランス大学界は、学生と若手研究者に将来のポストを提供できず、五月革命につながった。大学の学歴が学生に利益をもたらさず、大学界における再生産の働きが危機的状況にあったのである。学歴＝資格の捉え方において、学歴＝資格が、支配・服従の決め手の様に論じられているが、一面的であると考えられる。大学卒の学歴の価値が今日、経済界・政界への入界に対してどれだけの決定力を持つのか、問われるところである。また、ブルデューは、グローバリゼーションの中での文化の危機について、文化がグローバル化し、マスコミによりコマーシャル化することについて、文化の自律性が危機に瀕しているとして批判している。個別的な文化、地域文化における独自の再生産過程の自律性が危ぶまれる状況にあるのである。

ブルデューの再生産論においては、社会の「変動の問題がアプリオリに排除させてしまっているのではないかという批判」<sup>50</sup>がある。再生産と変動の関係がスタティックな機能主義的な捉え方になってしまっているのではないかという批判である。しかし、生産と再生産は同時に進行しており、変動がその過程に組み込まれているとするのが、アルチュセール以後の再生

産論の特徴である。大学の再生産において自律性を強めることによって、国家の権力支配から自由に、また民衆の知への接近の可能性が増大する。このことによって、大学の相対的自律性並びに民衆の知の再生産過程への参入・受容が行われ、社会との接合が進められ、大学界と民衆の相互関係に変化が生ずるとする見方もある。

また、『再生産』過程に生かされている人間の『主体性』へのまなざしが十分でない<sup>51</sup>として、個々の主体的な選択的行為が十分考察されていないという批判がある。このような批判は、構造主義社会学に対して常に問われ続けているものである。ブルデューは、ハビトゥスという概念を導入し、構造が再生産される過程における主体的な行為の存在、ハビトゥスが働くふるまい方・習性の働きについて論じている。

「文化」の捉え方について、支配階級の文化が主として論じられており、それと比較して労働者や中産階級の文化が論じられておらず、その独自性や文化資本としての役割機能が検討されていないという批判もある。支配階級のイデオロギーが学校界を通して伝達されることを暴露しつつも、被支配階級は結局、支配階級により正当化された支配的な文化に服従させられる、という側面が主張されている。民衆の文化創造に関する考察がそれに対して、不十分ということである。ブルデューは、民衆・大衆による文化的生産・再生産の機能についても、詳細に論じるべきである。『国家貴族』で論ずる対象は、支配階級の再生産であった。比較すると、下層の人々の文化的再生産についての考察は不十分であると言えるのである。

学校は文化的再生産を行う「界」である。しかし、ブルデューが論ずる様な、支配階級の文化の正当性の「誤認」を通して行っているのではないという批判がある。<sup>52</sup>さらに、ブルデューが使用する「キー概念である《恣意性》そのものにたいする考察も展開していません。つま

り、教育内容の構成そのものは、括弧にいれられたまま<sup>53</sup>であり、教育内容についての検討が十分になされていないという批判がある。教育内容の概念について十分な検討がなされないまま用いられていて、学校界における文化である教育内容がブラックボックスに入ったままである、という批判である。ブルデューの理論は、学校界に対してイデオロギー的に働く権力の在り方が、隠蔽されていることを明らかにしているものの、そのイデオロギーによって統制される文化である、教育内容の伝達プロセスについての考察が不十分であるとは言えないだろう。

ブルデューはかつて、フランスにおける教育改革について提言をまとめた経験から、学校のカリキュラムの編成と伝達について論じるべきであった。

ブルデューは、ミッテラン大統領から、未来の教育に向けての改革提言を作成するよう委嘱を受け、コレージュ・ド・フランス教授団の中心として提言をまとめた。

『『未来の教育のための提言』——フランス共和国大統領の要請に基づき、コレージュ・ド・フランス教授団により作成された——』による9つの提言は、以下の通りである。<sup>54</sup>

- 1、科学の統一性と文化の多元性
- 2、優秀さの形態の多様化
- 3、機会の複数化
- 4、多元性の中での多元性の統一
- 5、教えられる知識の定期的検討
- 6、伝達される知識の統合
- 7、途切れることのない、また、交互に行われる教育
- 8、現代的普及手段の使用
- 9、自治のなかでの、自治を通しての解放

この提言を要約すると「調和のとれた教育というものは、科学的思考に内在した普遍主義・人間諸科学が教示する相対主義の双方を両

立」すること。「学校による成績判定のもたらす影響を可能な限り弱め・・・やり直しの効力」を高めること。「不利な条件におかれている個人および教育機関を保護しながら、自治的で多様な研究教育機関の間での真の競争」を可能にすること。「教育内容は、定期的な再検討に付され・・・知識の現代化」が求められること。「知識の総体を提供せねば・・・知識を統合する原理は歴史的統一性」であること。「教育は、一生を通して継続されるべき」であること。「学校は、外部の人間をそこでさまざまな協議や活動に参加させ・・・真の公民教育の実践の場」となること。以上である。再生産としての教育の在り方を示した貴重な提言である。特に、教育内容・カリキュラムが定期的に点検され、知識のリニューアルがなされることや、教育的知識が歴史によって統一されるという提言は、カリキュラムの構成・改革において重要な意義がある。

学校という再生産過程において、支配的なイデオロギーの「誤認」が、学校教育で教えられるカリキュラム・教育活動の背景に存在する、ということをはっきりとすることは、学校教育の正当性を保障する契機ともなる。ブルデューらの提言は、今日のカリキュラム改革においても活かされ、「承認」されるべきである。

学歴と人との関係について『『学歴資格』のもたらす文化内容の『制度化』は、人と人との関係を、資格を付与された地位と地位との関係に言わば『物象化』する<sup>55</sup>』のである。この物象化の作用について、資格・肩書き・学歴というレッテルは職業社会においては、人物証明となり人間性より前面に現れる。この転倒については、K.マルクスが論じたところである。ブルデューの学歴論に対する批判は、学歴資本が「経済資本・社会資本などのあらゆる資本への変換可能性が完全に保障されているかのような幻想<sup>56</sup>」を抱かされる点にある。しかも、今日

の学生の就業機会では、学歴資本が他の資本に変換される道筋は容易いものではない。代替雇用を初め、様々なタイプの就業は、スムーズな変換がなされていないことの裏付けとなっている。また、学歴保有者が、文化能力の保有者とイコールで結び付けられない状態は、ブルデュー再生産論では再生産プロセスの機能不全と言えるのではないだろうか。更に、ブルデューが論じているが、象徴資本は学歴＝資格ばかりではなく象徴暴力の典型としてジェンダー支配<sup>57</sup>という男性と女性間の階層関係の再生産にかかわる要因が、より複雑かつ多様に絡む、現代的状況があるのである。

ブルデューの文化的再生産論批判の最後は、知能・思考の心理学者J,ピアジェの心理学における「発生的認識論」からの問題提起である。J,ピアジェの心理学的認識論は、「発生的認識論」と言われ、認識を構築し、修正する主体、即ち主体の「自己の認識を構築し、体制化するその仕方」<sup>58</sup>を研究することを指して呼ばれる。

J,ピアジェは、科学的認識は、必然的に発生的であり、知的行為は関係の協応から成り立つとして「関係の認識論」を論じている。

関係には二つの型があり、「第一の型の関係は、『変容的』と呼ばれる関係、またはあるいは『歪曲的』とさえ呼ばれる関係」である。この関係の特徴は「人が懐疑的な意図から『すべてが相対的だ』と断定するときの常識が依拠する関係」である。<sup>59</sup> 関係を構成する要素が変容することが常である状態である場合である。他方の関係の型は「保存的」関係と呼ばれる関係である。換言すれば、関係が一定の恒常性が保たれている状態（＝保存状態）である。子どもの知能の発達段階において、7、8歳から11、12歳のすべての前操作段階・具体的操作の段階で、変容（＝歪曲）的關係が見いだされる。ある状態から次の状態への変容の過程が問題なのである。

J,ピアジェは「心理学者の見地からすると・・・・変容的關係によって、關係の客觀的理論をつくることができ」<sup>60</sup>と述べる。心理学の観点から、ブルデューの再生産論が主張する、教育を通して再生産される支配の關係がアプリオリに前提とされていることが問題となる。支配階級と非支配階級の關係が、構造的に維持されるような「保守的」關係であるならば、「關係の認識論」の観点からみて、構造の変容をとらえることを含む、客觀的理論を構成できないことになる。J,ピアジェの主張は「經濟的価値や興味の価値などのような非規範的価値に関するさまざまな体系は、この変容關係」<sup>61</sup>を含んでいるのであり、關係の認識において、ブルデューの關係認識が構造の変容關係を含んでいるか否かが問われるのである。發達の認識論に依ると、子どもの認識の發達は、保存と変容といった關係からなり「認識とはあらゆる面において力動的關係なのであり、外界に存在するものは、それを知らうとする生活体がそれと相互作用を営み、対象として組み立てない限り、それは認識の対象とはならない」<sup>62</sup>のである。ブルデューの客觀的認識が問われ、且つ、教育行為における再生産構造の変容（＝変換の過程）が、文化的生産論に意図されているか否かが問題とされるのである。

J,ピアジェに依れば、構造は変換の働きによって「形成されるもの、構成されるもの」であり、また「構造は変換の働きによって、保存されたり、革新されたりする」<sup>63</sup>のである。その過程における主体の活動の役割により、絶えず構造が再生産されることになるのである。J,ピアジェの認識論は、変容する主体の認識の形成と変容に関する心理学であり、その観点から、ピエール・ブルデューの文化的再生産論の問題を提起することができるのである。

## まとめにかえて

拙稿は、前論稿『ピエール・ブルデュー 教育社会学論——階級・権力・不平等の観点——』に続くピエール・ブルデューの教育社会学論である。サブテーマを、科学論、再生産論として論じた。ブルデューの研究対象は、文化・政治・美術・住宅事情・経済・学校・大学・科学・写真・言語など広範囲に及ぶ。研究に使用する学術用語についても、社会学、哲学、政治学、経済学、統計学等、多様な学問領域に及んでいる。ブルデューの研究は、学際的と言っても過言ではない。

教育社会学も対象・アプローチが多様であり、機能主義・葛藤論・歴史社会学・現象学・比較社会学・数理統計等様々である。再生産論は、その一角を占めている。領域の広さとともに実証性が求められ、調査研究が盛んに行われている。

我が国におけるブルデューの研究は、文化的再生産が主であり、ハビトゥス、教養、身分、資本、戦略、界等といった概念を用いた理論構成がなされている。

拙稿では、先行研究と対照し、ブルデューの理論を基に、学校論、教育内容・カリキュラムを検討した。また、学歴＝資格の持つ意味、働きについて考察を試みた。

就学機会の問題は、その後の人生の選択において、不平等の原点ともなる。ブルデューの社会学は、さまざまな教育の問題に対して、権力や資本という捉え方の観点を提示する。本稿では論じてはいないが、認識論的研究では、大学研究者の省察・反省的態度が求められる。

前論稿で、社会学全体のパラダイム転換について疑問を呈したが、ブルデュー以前の社会科学と以後の社会科学との間に「認識論的切斷」（ルイ・アルチュセール）とみなされる厳密な区別をつけることができるか否か。部分的では

あるものの、教育社会学においては、ブルデュー理論をベースとした研究もみられる。今後、研究者グループの中で、ブルデュー学派、あるいはパラダイムの転換と認められる研究成果が現れるのではないかと、ブルデュー教育社会学研究の発展を期待してまとめに代える。

## 引用文献

- 1 R,K,マートン 森東吾 森好夫 金沢実 中島竜太郎共訳（1978）『社会理論と社会構造』みすず書房、506頁。
- 2 大膳司（1985）「報償体系におけるエポニミー」新堀通也編『学問業績の評価——科学におけるエポニミー現象』玉川大学出版部、23頁。
- 3 『同上書』24頁。
- 4 有本章（1984）「科学社会学の研究動向——欧米を中心に」新堀通也編『学問の社会学』有信堂高文社、23頁。  
新富康央（1984）「機能主義的科学社会学の基礎理論」新堀通也編『同上書』37頁、42頁、44頁。
- 5 トーマス・クーン 中山茂訳（1976）『科学革命の構造』みすず書房、11頁、107頁。
- 6 田原音和（1993）『科学的知の社会学——デュルケームからブルデューまで』藤原書店、104頁。
- 7 D,L,エックバーク レスター・ヒル二世（1984）「パラダイム概念と社会学——批判的概観——」中山茂編『パラダイム再考』ミネルヴァ書房、105頁、108頁、127頁。
- 8 ピエール・ブルデュー 加藤晴久訳（2011）『科学の科学——コレージュ・ド・フランス最終講義』藤原書店、91頁。
- 9 『同上書』96頁、139頁、140頁。
- 10 三浦直子（1999）「反省的社会学の生成——ブルデュー社会学における認識論の位置づけをめぐる——」P,ブルデュー社会学

- 研究会『象徴的支配の社会学』恒星社厚生閣、19頁。
- 11 ピエール・ブルデュー 加藤晴久訳 (2011)『前掲書』47頁。
- 12 『同上書』152頁。
- 13 『同上書』156頁。
- 14 隠岐さや香 (2001)「ブルデューの科学論」情況出版編集部編『ブルデューを読む』情況出版、114頁。
- 15 ルイ・アルチュセール エチエンヌ・バリバル 権寧 神戸仁彦訳 (1985)『資本論を読む』合同出版、378頁、364頁、365頁、366頁。
- 16 ジュディス・バトラー 伊吹浩一 (2000)「良心がわれわれみなを主体にする」情況出版編集部編『前掲書』126頁。
- 17 L,アルチュセール 西川長夫訳 (1972)「イデオロギーと国家のイデオロギー装置(上)——探究のためのノート——」『思想』第7号、No.577、岩波書店、126頁、127頁。
- 18 『同上書』125頁。
- 19 宇波彰 (2000)「ルイ・アルチュセール論」情況出版編集部編『前掲書』59頁。
- 20 ルイ・アルチュセール 西川長夫 伊吹浩一 今野晃 山家歩他訳 (2005)『再生産について——イデオロギーと国家のイデオロギー装置』平凡社、346頁。
- 21 ピエール・ブルデュー 立花英裕訳 (2012)『国家貴族II——エリート教育と支配階級の再生産』藤原書店、484～485頁、496～497頁、498～499頁。
- 22 『同上書』505頁、516頁、544頁。
- 23 『同上書』585頁。
- 24 ピエール・ブルデュー 立花英裕訳 (2012)『国家貴族I——エリート教育と支配階級の再生産』藤原書店、287頁。
- 25 A,D,キング編 山中弘 安藤充 保呂篤彦訳 (1999)『文化とグローバル化——現代社会とアイデンティティ表現』玉川大学出版部、129頁、140頁。
- 26 ピエール・ブルデュー 荒川幾雄訳 (1975)「知の場と創造投企」ジャン・ピヨン編北沢方邦他訳『構造主義とは何か』みすず書房、129頁。
- 27 竹内洋 (2000)「学歴エリート・教養・文化資本」宮島喬編『文化』講座社会学第7巻、東京大学出版会、73頁、84頁。  
竹内洋 (1999)『学歴貴族の栄光と挫折』〈日本の近代12〉中央公論新社、279頁。
- 28 ジューン・R・マーティン 生田久美子監訳 尾崎博美他訳 (2008)『カリキュラム・ミスエデュケーション——「文化遺産の伝達」とは何なのか——』東北大学出版会、25頁、147頁。
- 29 ピエール・ブルデュー 丸山茂・小島宏・須田文明訳 (2007)『結婚戦略 家族と階級の再生産』藤原書店、276頁。
- 30 小松田儀貞 (1997)「日常実践を貫くもの——象徴的権力と支配へのまなざし P,ブルデュー」小林一穂編『行為と時代認識の社会学』創風社、204頁。
- 31 宮島喬 (2001)『文化と不平等 社会的アプローチ』有斐閣、110頁。
- 32 黄順姫 (1988)「ハビトゥスによる学校生活への適応過程——高校段階における事例を通して——」日本教育社会学会編集委員会編『教育社会学研究』第43集、東洋館出版社、174頁。
- 33 黄順姫 (1998)『日本のエリート高校——学校文化と同窓会の社会史』世界思想社、121頁。
- 34 ピエール・ブルデュー 石崎晴己訳 (1998)『構造と実践——ブルデュー自身によるブルデュー——』新評論、73頁。
- 35 ピエール・ブルデュー 加藤晴久・石井洋二郎・三浦信孝・安田尚訳 (2007)『実践理

- 性 行動の理論について』藤原書店、49 頁。
- 36 宮部宮京子（1999）「ブルデューにおける『象徴性』と『ハビトゥス』」P,ブルデュー社会学研究会『象徴的支配の社会学 ブルデューの認識と実践』恒星社厚生閣、53 頁。
- 37 宮島喬（2000）「社会の文化的再生産と変動」宮島喬編『文化』講座社会学第 7 卷、東京大学出版会、196～197 頁、198 頁。
- 38 ピエール・ブルデュー 都村聞人訳（2004）「生成論的構造主義」ピエール・アンサール 山下雅之監訳『社会学の新生』藤原書店、50～51 頁。
- 39 秋永雄一（1987）「現代における『身分』と教育——『文化的再生産』への資格——」日本教育社会学会編集委員会編『教育社会学研究』第 42 集、東洋館出版社、98 頁。
- 40 刈谷剛彦（2008）「高度流動化社会」直井優 藤田英典編『階層』講座社会学 13、東京大学出版会、118 頁。
- 41 宮島喬（1994）『文化的再生産の社会学——ブルデュー理論からの展開』藤原書店、155 頁。
- 42 ピエール・ブルデュー&ジャン＝クロード・パスロン 宮島喬訳（1991）『再生産 教育・社会・文化』藤原書店、237～238 頁。
- 43 ピエール・ブルデュー 原山哲訳（2004）『資本主義のハビトゥス アルジェリアの矛盾』藤原書店、64 頁。
- 44 ピエール・ブルデュー 立花英裕訳（2012）『国家貴族I——エリート教育と支配階級の再生産』藤原書店、108 頁、212 頁、389 頁。
- 45 ピエール・ブルデュー 石崎晴己・東松秀雄訳（1997）『ホモ・アカデミクス』藤原書店、233 頁。
- 46 ピエール・ブルデュー リュック・ボルタンスキー 森重雄訳（1985）「教育システムと経済 学歴＝資格と職業」『現代思想』11 月号、第 13 卷第 11 号、青土社、66 頁。
- 47 ピエール・ブルデュー 稲賀繁美訳（1993）『話すということ——言語的交換のエコノミー』藤原書店、35 頁。
- 48 キース・A・リーダー 本橋哲也訳（1994）『フランス現代思想 1968 年以降』講談社選書メチエ、講談社、241 頁。
- 49 ゲイビー・ワイナー 梅景優子訳（2005）「個別性のなかの類似性か、それとも、類似性のなかの個別性か？——ヨーロッパにおける教師教育と専門職職能開発」〈教育と社会〉研究第 158 号編集委員会編『〈教育と社会〉研究』第 15 号、一橋大学〈教育と社会〉研究会、3 頁。
- 50 宮島喬（1991）「文化的再生産論の展開」宮島喬 藤田英典編『文化と社会 差異化・構造化・再生産』有信堂高文社、16～17 頁。
- 51 赤尾勝己（1990）「教育における文化的・社会的再生産論の現在——脱組織資本主義における再生産様式の変容」山本哲士監修『教育が見えない 子ども・教室・学校の新しい現実』三交社、236 頁。
- 52 『同上書』237 頁。
- 53 山本哲士（1996）『学校の幻想 教育の幻想』ちくま学芸文庫、筑摩書房、98 頁。
- 54 コレージュ・ド・フランス教授団 堀尾輝久 石田英敬・久仁子訳（1988）「未来の教育のための提言」『世界』第 512 号、岩波書店、293～311 頁。
- 55 安田尚（1998）『ブルデュー社会学を読む 社会的行為のリアリティーと主体性の復権』青木書店、138 頁。
- 56 高橋一郎（1990）「文化的再生産論の再検討——「教育科学の社会学」の試み」ソシオロジ編集委員会編『ソシオロジ』第 35 号 1 号、第 108 号、社会学研究室、12 頁。
- 57 杉原名穂子（2000）「日本におけるジェンダーの再生産」宮島喬編『文化』講座社会学



- 学第7巻、東京大学出版会、159頁。
- 58 ジャン・ピアジェ 岸田秀訳（1978）「心理学と哲学」『現代思想』青土社、4月号、183頁。
- 59 J.ピアジェ 滝沢武久（1980）『思考の誕生 論理操作の発達』エピステーメ叢書、朝日出版者、31頁。
- 60 『同上書』40頁。
- 61 『同上書』41頁。
- 62 H,G,ファース 植田郁朗 大伴公馬訳（1975）『ピアジェの認識理論』明治図書、41頁。
- 63 久米博（1978）「ピアジェと構造主義」『現代思想』青土社、4月号、144頁。